

[1] 変数の数が式の数より多い斉次連立 1 次方程式は自明でない解を持つ。

連立 1 次方程式の n コの変数を x_1, \dots, x_n とおき, これを縦に並べた $n \times 1$ 行列を \mathbf{x} とおく. 連立 1 次方程式の係数行列を $A = (a_{ij})$ ($1 \leq i \leq m, 1 \leq j \leq n, m < n$) と置けば, 考えている斉次連立 1 次方程式は, $A\mathbf{x} = 0$ と表せる. 拡大係数行列を \hat{A} とすると, $\text{rank} A = \text{rank} \hat{A}$ なので, 必ず解をもつことがわかる (特に, この連立 1 次方程式は自明な解 $\mathbf{x} = 0$ を持つ.) ところが, このとき, $\text{rank} A \leq m < n$ なので, $\text{rank} A < n$. よって, 上の連立 1 次方程式は, $n - \text{rank} A \neq 0$ コの変数の値を定めるごとに解が定まることになる. すなわち, 解は無数にある.

[2] $n > m$ とする. m コの 1 次独立なベクトルの 1 次結合として表される n コのベクトルはつねに 1 次従属である. すなわち,

$$\begin{cases} \mathbf{a}_1 = a_{11}\mathbf{b}_1 + a_{21}\mathbf{b}_2 + \cdots + a_{m1}\mathbf{b}_m \\ \mathbf{a}_2 = a_{12}\mathbf{b}_1 + a_{22}\mathbf{b}_2 + \cdots + a_{m2}\mathbf{b}_m \\ \cdots \quad \cdots \quad \cdots \quad \cdots \quad \cdots \\ \mathbf{a}_n = a_{1n}\mathbf{b}_1 + a_{2n}\mathbf{b}_2 + \cdots + a_{mn}\mathbf{b}_m \end{cases}$$

と表されていたら, $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n$ は 1 次従属である.

証明: $x_1\mathbf{a}_1 + x_2\mathbf{a}_2 + \cdots + x_n\mathbf{a}_n = 0$ のとき, $x_1 = x_2 = \cdots = x_n = 0$ 以外の解を持つことを示せばよい. この式に $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_n$ を $\mathbf{b}_1, \dots, \mathbf{b}_m$ で表したものを代入して整理すると, $(a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1n}x_n)\mathbf{b}_1 + (a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + \cdots + a_{2n}x_n)\mathbf{b}_2 + \cdots + (a_{m1}x_1 + a_{m2}x_2 + \cdots + a_{mn}x_n)\mathbf{b}_m = 0$ となる. したがって, 連立 1 次方程式 $A\mathbf{x} = 0$ が非自明な解を持てばよい (ここで, 連立 1 次方程式の n コの変数を x_1, \dots, x_n とおき, これを縦に並べた $n \times 1$ 行列を \mathbf{x} , $A = (a_{ij})$ ($1 \leq i \leq m, 1 \leq j \leq n$) と置いた.) ところが, $n > m$ なので, これは上の [1] より従う. (証明終)

[3] W を \mathbb{R}^n の部分空間とする.

(1) $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n\}, \{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_m\}$ がともに W の基底であるとすると, $m = n$.

(2) $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n\}$ を W の基底とする. このとき, W 中の n コのベクトル $\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_n$ が 1 次独立ならば, $\{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_n\}$ は W の基底となる.

証明: (1) $m < n$ とし, 矛盾を導く. $\{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_m\}$ は W の基底であるので, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n$ は, $\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_m$ の 1 次結合で表すことができる. すると, $m < n$ なので, [2] より, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n$ は 1 次従属となる. これは $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n\}$ が W の基底であることに反する.

(2) $\{\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_n\}$ が W の基底でないとする. W のベクトル \mathbf{x} で, $\mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_n$ の 1 次結合で表せないものがある. したがって, $\mathbf{x}, \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_n$ は 1 次独立である. しかし, $\{\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n\}$ は, W の基底なので, $\mathbf{x}, \mathbf{b}_1, \mathbf{b}_2, \dots, \mathbf{b}_n$ は, $\mathbf{a}_1, \mathbf{a}_2, \dots, \mathbf{a}_n$ の 1 次結合として表されるのだから, これは上の [2] に反する. (証明終)

[3] により, 次元の概念は, 基底の取り方によらず定まることがわかった.

[4] \mathbb{R}^n の部分空間 $\text{Span}\{\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_m\}$ の次元は, $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_m$ の中で, 1 次独立なベクトルの最大個数である.

証明: r を $\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_m$ のうち 1 次独立なベクトルの最大個数とする. また, そのときの 1 次独立なベクトルを $\mathbf{a}_{i_1}, \dots, \mathbf{a}_{i_r}$ とおく. $\text{Span}\{\mathbf{a}_1, \dots, \mathbf{a}_m\}$ の任意の元を \mathbf{x} とする. \mathbf{x} が $\mathbf{a}_{i_1}, \dots, \mathbf{a}_{i_r}$ の 1 次結合で表されればよい. そこで, \mathbf{x} が $\mathbf{a}_{i_1}, \dots, \mathbf{a}_{i_r}$ の 1 次結合で表せなかったとする. このとき, $(r+1)$ コのベクトル $\mathbf{x}, \mathbf{a}_{i_1}, \dots, \mathbf{a}_{i_r}$ が 1 次独立となり, これは, r の取り方に矛盾する (証明終)